

## 書 評

千田有紀 編

# 『上野千鶴子に挑む』

横 田 恵 子

本書は、2011年度をもって東京大学大学院人文社会系教授の職を退職されたフェミニズム研究のパイオニア、上野千鶴子氏の退官記念論集の代わりとして、教え子にあたる若手社会学者たちによって編まれた論集である。

執筆者のリストを眺めれば、上野研究室が優秀な若い社会学者を輩出した研究室であることは一目瞭然である。たとえば編者としてこの企画を編み出し、第一章も執筆している千田有紀氏、さらに第2章を執筆した妙木忍氏は、それぞれ「日本型近代家族：どこから来てどこへ行くか」（勁草書房、2011）と「女性同士の争いはなぜ起こるのか：主婦論争の誕生と終焉」（青土社、2009）という著書により、上野フェミニズムの系譜を継承している。第四章執筆の宮本直美氏は「教養の歴史社会学：ドイツ市民社会と音楽」（岩波書店、2006）によって歴史社会学と音楽社会学の融合を試みるとともに「宝塚ファンの社会学：スターは劇場の外で作られる」（青弓社、2011）を表して文化社会学者としての側面を見せている。さらに第七章執筆の北村文氏は、「日本女性はどこにいるのか：イメージとアイデンティティの政治」（勁草書房、2009）や「英語は女を救うのか」（筑摩書房、2011）などのフェミニスト・エスノグラフィーによって「日本人であり、女性であること」の政治性を論じる一方で、第12章執筆の阿部真大氏とのカジュアルな共著「合コンの社会学」（光文社、2007）もある。その阿部氏は上野研究室の後半のテーマである「ケア・労働」の領域

で研究をしており、バイク便ライダーや福祉労働に従事する若者たちの現状を丹念に記述したエスノグラフィーでデビューしている。また本書には執筆していないが、今年に入って「フクシマ論」で注目を集めている開沼博氏は、20年にわたる東大上野研究室の最後の教え子ということになる。

このような多種多様な教え子たちによって編まれた本書は、内容的にも非常に幅が広く、上野氏自身もあとがきでその点に触れて、「本書を読んだ読者は、執筆者たちの研究の対象と方法の多様性を見て、ウエノ・スクール（上野学派）というものがついに成立しなかったことを見てとるでしょうし、私自身も本書の執筆者たちを『上野の弟子』とか『わたしの学生』とかいう名称で呼ぶつもりはありません（p.471）。」としている。しかし、やはり上野氏自身が同じあとがきで続けて述べているように、学問の世界における知的格闘技において「いささか挑発的にかつ戦闘的であった（p.474）」上野ゼミの「戦闘モードのDNA（同）」が教え子たちには確実に伝わっている、つまり学問において学ぶべきは「何を、ではなく、いかに（p.475）」であり、それは上野氏から教え子たちに確実に受け継がれている、という自負も、師のほうにあるようだ。

本書は4部構成の形をとっている。それぞれ「第Ⅰ部 ジェンダー・家族・セクシャリティ」「第Ⅱ部 文化の社会学」、「第Ⅲ部 ポストコロニアル・マイノリティ」、そして「第Ⅳ部 当事者主権」として多方面にわたる上野氏の研究領域を網羅し、それぞれを2010年代の現在から照射して批判的検討を加えようというものだ。

「第Ⅰ部 ジェンダー・家族・セクシャリティ」では、上野氏の初期から中期に渡る仕事が論考の対象になる。まず最初に千田有紀が、上野氏の学界常識破りのデビュー作「セクシー・ギャルの大研究」（1982、カッパブックス）から「女という快樂」（1986、勁草書房）、「女遊び」（1988、学陽出版）に至る著作に言及し、過激な装いの中に真摯なメッセージを込めるという初期の上野氏が採用した独特のフェミニズム戦略をとりあげる。一見、軽薄で過激に見えるそれらの著作の装いの中に込められているのは、たとえばゴフマンによって呈

示された「役割乖離」の実証であり、そこから「女性が自らの身体の定義権を取り戻し、身体に関する自尊感情を作り上げる」ことを導き、称揚するメッセージが込められていることを、千田は看破する。この戦略によって、上野氏の登場以後の女性に関する諸問題は、「婦人問題」のカテゴリーを越えいわゆる「フェミニズムの言説」となり、セクシャリティに関する社会科学の言説として、男性もかかわるものとなっていった。

上野氏のフィールドは、次第にジェンダー問題、特に「主婦、近代家族」へと中心が移る。妙木忍は上野氏の「主婦論争研究」や1988年を中心にマスコミをにぎわせた「アグネス論争」に焦点を当てて論を展開することで、「主婦」や「近代家族」というキーワードが顕わになることになった、1980年代のフェミニズム内部における見解の違いを詳細に見ていく。それは次に続く時代、女性のライフコースの多様化とともに、「女性は共通の基盤を有するか」という今（2010年代）に至るまで解けない問題へと発展して行くことになる。

このようなフェミニズムの様相に男性学が絡んでくると、話はより複雑になる。齊藤圭介はここに注目し、上野氏が措定する男性カテゴリー・男性学を批判的に再検討する。

結局、フェミニズムは一般の日本社会において根付くことなく現在に至っている。その切り口と言説は、結局のところ当の女性たちに共有されず、女性たち自身の当事者としての語りを誘発することもなかった。宮本直美は、日本女性がとらわれている「かわいい」という規範にからめて、この浸透性に関わる問題を検証している。

「第Ⅱ部 文化の社会学」では、まず文学・文化批評に関わる上野氏の仕事が祖上へのほる。社会学者としてはいささかアウェー感が否めないこの領域での上野氏の業績を、栗田知宏が「男流」文学におけるホモフォビアとミソジニーを鍵として読み解いていく。さらにこの時期（1980年代後半から1990年代初頭）、上野氏の仕事はさらに広がりを見せ、越境していく。そのひとつ、消費社会論に関しては新雅史が論じている。そして「女性のことば」と「覇者の言

業」の問題を、「バイリンガルとジェンダー」の問題として引き継いだ北村文が、言語と権力との関係を丹念に考察する。ここでは、女性（学）のことが覇者（アカデミズム）のことが書き換えようとしたにもかかわらず、結果的には多くの女性（学）のことが覇者（アカデミズム）のことがによって書き換えられてしまった現実が顕わになる。

「第三部 ポストコロニアル・マイノリティ」では、国家による暴力が扱われる。松井隆志、島袋まりあ、福岡愛子によってたどられるのは、1990年代末から00年代にかけて上野氏によって論じられてきた「家族・共同体・国家」、「従軍慰安婦問題」であり、「沖縄問題」であった。

00年代以降現在に続く上野氏の研究主題で扱われるのは「ケア」の社会学である。「第四部 当事者主権」はこのテーマを扱う。当初、女性たちが参加するワーカーズ・コレクティブの参与観察から出発した研究群は、介護保険制度導入をきっかけに市民事業がケア産業に進出する過程をフォローすることになり、さらにその後は視点を変えて「介護される側」の視点からの社会・制度の分析となる。それは徹頭徹尾、上野氏自身の当事者性と関係してうつろうテーマといえる。山根純佳・山下順子は上野によって世に供された「おひとりさま」というアイデンティティについて、批判的な考察を加える。特に「おひとりさま」を支える介護職が、若者や女性の不安定雇用で成り立っている現実を指摘し、介護労働問題や若者の雇用問題を視野に入れた高齢者の自立問題論を期待する。朴姫淑は、同じテーマを「女縁」を切り口に再検討していく。

1980年代に専業主婦が「脱・専業主婦化」の第一歩として紡いだ女性同士の選択縁のひとつとして、ワーカーズ・コレクティブがあった。この活動に女性の自立の可能性を見出し、焦点をあてた上野氏は、その後それらの協働活動が介護保険事業に参入していく過程もフォローしていくのだが、朴姫淑は協働活動の有意性を過度に主張することへの疑義を呈している。伊藤奈緒は、上野氏によって呈示された「当事者性」概念や「ニーズ」概念そのものの批判的分析を試みる。引き続いて小池靖は、さらに踏み込んで「社会学は、必ず当事者に

〔上野千鶴子に挑む〕

寄り添わなくてはならないのか」「社会学者は社会的提言をすべきなのか」と、上野社会学の根本理念を問題にする。

本書の特徴は、すべての論考について上野自身が自己言及的な応答をしていることである。それらの応答編を追うことで、上野社会学がどのように変遷してきて、どこに行こうとしているのかが垣間見えるのもまた興味深い。

(勁草書房、2011年3月、本文495頁、本体2,800円+税)